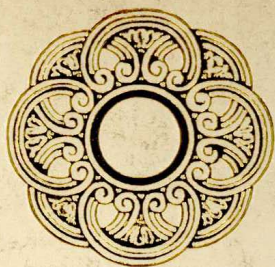


ルネサンスの文学と思想



平井正穂教授還暦記念論文集

ルネサンスの文学と思想

筑摩書房

執筆者

高松 雄一 (たかまつ・ゆういち) 東京大学教授
川西 進 (かわにし・すすむ) 東京大学助教授
道家 弘一郎 (どうけ・こういちろう) 聖心女子大学教授
玉泉 八州男 (たまいずみ・やすお) 東京工業大学助教授
河村 錠一郎 (かわむら・じょういちろう) 一橋大学助教授
猪俣 浩 (いのまた・ひろし) 学習院大学教授
宮崎 雄行 (みやざき・ゆうこう) 武蔵大学教授
中野 里皓史 (なかのり・こうし) 東京大学助教授
丸谷 才一 (まるや・さいいち) 作家
児玉 久雄 (こだま・ひさお) 学習院大学教授
羽矢 謙一 (はや・けんいち) 明治大学教授
出淵 博 (いずぶち・ひろし) 東京工業大学助教授
篠田 一士 (しのだ・はじめ) 東京都立大学教授
戸田 基 (とだ・もと) 東京大学助教授
磯田 光一 (いそだ・こういち) 文芸評論家
Peter Milward (ピーター・ミルワード) 上智大学教授
上田 和夫 (うえだ・かずお) 研究社出版部長

ルネサンスの文学と思想

1977年10月31日 初版第1刷発行

発行者 井上達三

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2—8

郵便番号 101-91

電話 03-291-7651

振替 東京6-4123

明和印刷 矢嶋製本

〔分類〕1098〔製品〕83546〔出版社〕4604

序

平井正穂先生が、東京大学文学部英吉利語学・文学科の新任助教授として着任されたのは、一九四八年である。講義は後期から開講され、題目は、エドモンド・スペンサーに関する特殊講義、それに、ウエブスターの『白い悪魔』、キーツの『エンディミオン』を、それぞれ、テキストにした演習だった。この初年度における講義内容のなかに、先生の学業のすべてが展望される。

すなわち、斎藤勇教授のイギリス・ロマン派詩の研究を深化することは当然として、あらたに、イギリス・ルネサンス文学研究を組織的に行おうとすることであった。もちろん、シェイクスピアやミルトンについては、市河三喜、斎藤勇両教授の先駆的な業績がある。そして、シェイクスピアおよび、エリザベス朝演劇については、先生の先任者である中野好夫教授の論考と翻訳がすでに行われている。

こうした諸先輩の業績を視界に置きながら、平井先生のイギリス・ルネサンス文学研究が目指したのは、ルネサンスという世界的な精神現象のなかで、イギリス文学がいかなる空間を創造したか、その特殊性と普遍性を追求することであった。いわば、精神史的方法を導入することによって、

二、三の人名によってしか理解されていなかったイギリス・ルネサンス文学の精神風土の全容と内実が、はじめてあきらかにされたのである。

しかし、先生は精神的な図式化に甘んずることはなく、あくまで、作品のテクストに密着することを、みずから実行もし、また、われわれにも教えてやまない、文学の熱烈な愛好者である。そして、先生のイギリス文学に対するかぎりない愛が、つねに、アクチュアルな今日の問題から発し、また、そこにもどることも、あらためて言い添えるまでもない。T・S・エリオットをはじめ、二十世紀のイギリス文学は、ある意味では、先生の文学研究の基本と言ってもよく、この基盤があつてこそ、ルネサンス文学研究の大業も、しかと安坐しうるのである。

一九七一年、平井正穂先生はめでたく六十歳を迎えられ、翌年、二十四年にわたる職を退かれた。遅ればせながら、ここに、知友弟子つどつて、ささやかな文集を、先生に捧げることをよろこびとしたい。

一九七七年十月

「ルネサンスの文学と思想」刊行会
代表 篠田 一 士

ルネサンスの文学と思想 目次

スペンサーの夢、ダンの夢

シェイクスピアの『ソネット集』

における時間と愛の葛藤

『闘士サムソン』について

* * *

さんざしの枝に寄せて

——宮廷愛とルネサンス——

ベルラ・マニエラ

断片としての人間

——転回期の人間像と世界像——

* * *

高松雄一 9

川西進 37

道家弘一郎 57

王泉八州男 79

河村錠一郎 119

猪俣浩 139

『ペリクリーズ』覚書

宮崎雄行 163

『恋の骨折損』の構造

中野里皓史 189

ハムレットの小唄

丸谷才一 209

『フォースタス博士』の悪魔

児玉久雄 255

幻影と虚無

羽矢謙一 279

——シリル・ターナーの『復讐者の悲劇』について——

* * *

イエイツのシェイクスピア体験

出淵博 303

あるエッセーの周辺

篠田一士 329

C・S・ルイスの批評

戸田基 345

平井正穂論

——そのルネサンス像を中心に——

磯田光一 367

* * *

THE JEWEL-HARDING CONTROVERSY

Peter Milward 430

平井正穂教授年譜・著作目録

上田和夫編 431

ルネサンスの文学と思想

スペンサーの夢、
ダンの夢

高
松
雄
一

夢と現実という対立概念は文学とともに古く、また新しい。しかし、両者がつねに截然と区分される二つの世界であり続けていたならば、この主題はさほど複雑な変奏をかなでることはできなかったであろう。人は眠りのなかで夢の世界をさまよい、目覚めて日常の現実にもどる。なるほどその経験の落差のはなはだしさは、それだけでも充分に文学の主題として機能しうる衝撃力をそなえてはいる。たとえばチャールズ・ラムの『エリア随筆』にある「夢の子供たち」はそういう認識の衝撃をごく意識的に利用した作品だと言えるだろう。子供らにせがまれて、曾祖母の面影や、屋敷のたたずまいや、男らしい伯父の挿話などを話してきかせるという夢のなかの家庭の団欒は（この場合のように母親のいない家庭の生活を団欒と呼びうるなら）、実は一度も結婚などしたことの無い独身の男の侘しい現実と対比されることによって、はじめてヴィクトリア朝の家庭の類型からぬけだして忘れがたい切実感をもつのである。そういう例がありはするものの、しかしこういう対立に終始するならば夢は文学の主題としては比較的限制された役割をはたすにすぎない。所詮、夢は一時的な逃避の手段でしかないものであり、われわれの生きるべき現実世界はつねに確固として別個に存在するという、ほとんど健全なと言ってもいいほどの実証的精神が実はこの種の哀感の基底にある。ここでは夢による願望の充足は最後には否定されることを前提として成立しているのだ。

厄介なのは、夢と現実是对立するだけではなく、両者の価値がいつどこで顛倒するかわからない、夢がむしろ真実となり、あるいは少くとも真実とどこかで繋るものとなり、そしてそのときにわれわれの现实生活は仮象にすぎなくなるという考えが、これもまた古くから人間の心のなかに牢乎として根をはっていることだ。この考えをおしつめるならプラトンのイデア論まではゆきつくことになるであろう。いまはできるかぎり夢の機能そのものに即して考察をすすめたいが、たとえば中世フランスの寓意詩『薔薇物語』の冒頭で、作者ギヨーム・ド・ロリスが、夢はしばしば真実を予知するものだという弁明を補強するために、新プラトン主義者マク

ロビウスの評釈を引きあいに出しているのは一例としてあげておくに価いする。これから語られることが明らかに寓意というフィクションであるからこそ、前もって一層その真実性を強調しておかねばならないという手続き上の問題も、ここには介在しているであろう。しかし、詩人が夢に見たことを語るといふ約束事で始まるこの「夢の寓意」(dream allegory)のジャンル自体が、そもそも価値の顛倒を前提としてはじめて成立する性質のものなのだ。言うまでもなく、この場合の夢は啓示的なヴィジョンに転化するものであり、作者ロリス自身も夢とヴィジョンを同義語として用いている(ハリー・W・ロビンズの英訳による)。逆に言えば、詩人はヴィジョンを具象化するための便宜的な媒体として夢という組織体を借用したということにもなるが、借用したとたんに夢とヴィジョンが区別しがたいものとなることに変りはない。この仕組に関するかぎりは、宮廷風恋愛を説く『薔薇物語』であろうと、ラングランドの宗教的な寓意詩『農夫ピアズ』であろうと、同じことが言えるであろう。

また夢がヴィジョンであり、真実でありうるならば、むしろこれを意図的に現実の生活のなかに引きずりこもうという考え方があってもおかしくはない。つまり、夢は日常的な秩序や常套的な因果関係を破壊するため役割をになわされるのである。こういう意志的な夢の使い方は、たとえば現代の超現実主義詩人の態度のなかに明確に認めることができる。デイヴィッド・ギヤスコインの『超現実主義概観』(一九三五)の一節を例としてあげよう。

夢と醒めた人生、非現実と現実、無意識と意識、これらの間に存在する苛酷な矛盾を縮小してゆき、ついにはまったく抹殺してしまうこと、こうして、今までは詩人たちだけの領域であると考えられていたものすべての人々の公認共有地とすること、これこそが超現実主義運動の宣言する目的なのだ。

この場合の夢は彼の言葉によれば、非現実でもあり無意識でもあるが、同時に詩人だけの領域をさすものでもある。またギヤスコインはこの小冊のべつな箇所、よりあからさまに夢と詩を同義に用いてもいる。つまり彼は夢を媒体として無意識と詩的想像力を連結させたうえで、これが現実世界の変革に参与することを期待しているのだ。むろん、この夢に対するほとんど過重なとも言える期待は、ひとりの若い詩人の恣意的な願望から生じただけのものではないし、超現実主義運動に特有の現象であるとも言えない。世紀末の詩人たちもより咏嘆的な音調をもってではあれ夢への関心を述べているのだし（たとえば若いイエイツの代弁者である「悲しき羊飼」は、「灰色の真理」が現代世界を支配していることを嘆いて、「夢みよ、夢みよ、これもまた真実なのだから」とうたう）、象徴主義詩人たちも夢に強固な詩論の拠点を見いだしたはずである。

しかしここでもまた焦点がぼけはじめ。夢は詩的想像力のなかに拡散しはじめるように思われる。たしかに夢はその上層においてヴィジョンや詩的想像力と同等のものと見なされ、啓示的体験や創作行為に結びつく。しかしまた夢はその下層において肉体的欲望や神経組織の作動と密接に結びついているのであり、少くともある程度は外的な刺激の支配下におかれうるものでもある。夢のもつこの両面性——あるいは超越的性格のなかにひそむ形而下的性格——が近代詩人の問題として存在していたことを忘れるわけにはいかない。たとえば私たちはコウルリッジの「クローブラ・カーン」の場合を思いおこすであろう。作者の前書が事実をのべているのなら、この詩においてまさに夢の両面性が文字通りに合致したのである。しかもその夢は阿片の吸引という刺激によって誘起された夢でもある。

しかしながら、この問題は個々の具体例を超えて、詩的認識のあり方そのものに関わってくる。たとえば T・S・エリオットが「ダンテ論」のなかで、「彼〔ダンテ〕は人々がまだヴィジョンを見ていた時代に生き

ていた。「中略」われわれは夢のほかには何物をも持っていない。われわれはヴィジョンを見ることが「中略」かつてはより意味のある、興味深い、訓練された類いの夢であったことを忘れた。われわれは夢が下方から生ずるのを当然のように考えている。その結果として、おそらくはわれわれの夢の質が墮落したのである」と述べるとき、彼は実作においてはともかく、その批評的意志においては、夢のなかに超越的な性質を認めることを拒否したのである。しかし超現実主義の詩人たちは、オクタビオ・パスが言うように「夢とヴィジョンを称揚するが、両者を区別することを拒否した。両方ともが下方から生ずるものであり、両方ともが深淵の啓示である——人間と現実の『別な面』である」（『泥土の子ら。ロマン主義からアヴァン・ギャルドにいたる近代詩』一九七四）。

またユングに見られるような、夢には個人的な無意識の層から生ずる部分と、集合的な無意識の層から生ずる神話原型とが混在しているという考え方にも、この夢の両面性の認識が反映していると言えるであろう（たとえば「分析的心理学と文学作品との諸関係について」を見よ）。

だが無意識の領域の存在や、日常的現実のなかに侵入し、変革しようとするその力についての認識は、なにも精神分析学がはじめてもたらしたものではない。イエイツは、心霊学や、神秘学や、新プラトン主義哲学などの雑然たる知識の集積からひとつの「体系」を組み立てるが、彼の基本的な考えが（たとえば「大いなる記憶」が存在するという彼の信念が）、ある意味でユングの神話類型に符合しているのを晩年になってからさることになる。またさらに溯れば、ロマン派詩人たちの場合にも、こういう精神の領域に対しては、個別的、偶発的な事例を越えて、ひとつの共通する姿勢が見られるのだ。ワーズワースは『序曲』と『逍遙篇』がその一部分となるはずであった壮大な未完の叙事詩『隠遁者』の「趣意書」のなかで、人間の心の深淵においてその実体を探ることが詩人として自らに課した仕事であると述べていたし、コウルリッジは『文学的自叙伝』の